



# わかば

2021. 2. 6  
(令和3年) 第20-38号

文責 校長 保谷 力

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

教育目標 「帰国後、日本の教育に円滑に適應できるよう、日本の学校における学習指導要領に沿った国語、算数(数学)の学力の維持、併せて生活・生徒指導を行う。」

重点目標 一人一人の笑顔輝く学校づくり～期待登校・満足下校～



## 特別な卒業式

校長 保谷 力

今年の卒業式は特別な卒業式です。こうしたコロナ蔓延の世の中で卒業学年を送った幼稚園、6年生、中学3年生、そして高校3年生になります。通常であれば、思い出に残る最後の学年をクラスメートと共に泣いたり笑ったりしながら過ごすことができたに違いありません。卒業生の心の思いが一つの詩「ひと味ちがった6年生」に現れています。友だちと対面しながら話すという当たり前の生活もできず、協力し合うはずだった運動会も学芸会もできませんでした。しかし、このような特別な時代に卒業を迎える卒業生の皆さんは「誰よりも忘れられない。」年になったことは間違いありません。

いつの日か感染は終息します。終息した後に同じような社会が戻ってくるかは分かりませんが、この詩のように「忘れられない特別な時代」として皆さんの心に刻まれたことは確かです。巨大ハリケーンの出現や地震、豪雨そして感染症の世界的拡大など、これからの社会は、不透明で不確定な時代であると言われます。戦後大きな成長を遂げてきた日本社会ですが、この75年間に社会を支える仕組みや人々の行動様式、価値観までも大きく様変わりしてきました。社会が劇的に変化する中で、今、子供たちに求められる力は、やはり「生きて働く力」であると考えます。「考える力」「判断する力」「表現する力」など、知識を詰め込んだだけでは得ることの出来ない力が新しい時代を切り開く原動力になっていくのだと確信しています。

残念ながら3月の卒業式は卒業生と担任のみで行うこととしました。しかし、今年の卒業式は卒業していく子供だけでなく、同じ時代を懸命に生きた日本人学校すべての子供たちにとっての頑張りの証が、今年の卒業式になると考えています。

6年生 国語の「思い出を言葉で」という单元より、各自が詩、短歌、俳句などを作って、自分の思いを発表してもらいました。子供たちにも好評だった2作品を掲載いたします。

ひと味ちがった六年生

6年 吉良有由

小学校最後の六年生  
親しい友と対面し  
笑ってすまして 語り合う  
授業を受けて 話し合う



協力し合える 運動会に学芸会  
桜舞い散る 春の日に  
ねぎらい合い 涙する卒業式

すべて夢に散るけれど  
ひと味ちがう 六年生  
忘れられない 六年生

運動会

6年 石川武蔵

一年生 アイルランドにいた  
二年生 九月から転入 運動会終わった  
三年生 工事のため午前だけの運動会  
四年生 日本帰省のため不参加  
五年生 運動会初参加  
六年生 コロナのため運動会中止

五年生の運動会  
初めての運動会  
きっと最後の運動会  
楽しかった がんばった ずっと忘れない



中国の作家魯迅の「故郷」より

中学部3年生 徳田 茉莉

私には、国語の単元、魯迅の「故郷」を読んで感じたこと、印象に残った場面がいくつかある。最初に感じたことは、中国の格差社会の悲しさだ。この話の中では、二人の人物、主人公「私」とルントウ(閩土)の関係が主に書かれている。無邪気で何も知らなかった幼い二人は仲良かった。大祭が終わるまで二人はずっと一緒にいて、まるで兄弟のような関係になっていた。しかし、大祭が終わるとルントウは家に帰ってしまい、その後贈り物をしたものの、二人は顔を合わすことはなかった。後に「私」は仕事のために浙江省へと帰る。二十年が経ち、「私」は故郷へ戻り、久しぶりにルントウと再会する。しかし、昔の幼いルントウはそこにはいなかった。背も伸び、目の周りは赤く腫れ、顔にはシワがある。その上、ルントウは「私」のことを「旦那様」と呼び、昔の関係は崩れてしまっていた。あれほど仲が良く、兄弟のような二人の関係は、大人になるにつれ、格差社会のために「大きな地位の差と言う壁」ができてしまっていた。一番印象に残った場面は、ルントウの五番目の息子、シュイションと「私」の甥ホンルが出会った場面だ。今のシュイションとホンルの関係は、まだ幼かったルントウと「私」の関係に似ていて、私は、この場面に感動した。「私」がシュイションとホンルの関係を見て「はっと胸をつかれた」と言ったセリフでは、「私」とルントウの現在の状況を思い知り、悔やんでいることが伝わる。「私」はルントウとの隔絶を嘆き、次の世代に希望を託すのではなく、希望を地上の道として現実化する可能性に気づく。今は昔と比べると、格差社会や差別は少し改善されているが、人種差別、性別差別などはまだ世界で続いている。アフガニスタンなどでは、未だに格差で地位が決まっている。コロナウイルスが流行っている今でも、Black Lives Matter 抗議は続いている。人類が完全に差別を無くすまでには、まだ時間がかかるかもしれない。しかし、私は、私なりにできることをして差別を減らし、全人類が平等に生きられる世界に近づきたいと思っている。